



〔令和元年8月14日 定例会発表要旨〕

銭湯に見る「まち文化」

まち文化研究所 主宰 塚田敏信氏

身近な暮らしの産物である「まち文化」には、いくつもの切り口がある。文献や写真などの資料を読み込み、事例やデータ等を駆使して編み上げるのもその一つで、多くはこの方法をとる。だが今回は、すでに多くの人の実生活から離れている銭湯文化を取り上げるにあたり、現物資料と映像にふれながら、個々の歴史を掘り下げ 銭湯の全体を体感する方法を取った。



そのためこの稿では、8月の発表当日で割愛した 銭湯自体の歴史等を加えて整理することにする。文字での歴史解説は後刻文章を通して理解することができるが、現物の体感はその場を離れると難しい。殊に札幌は市設の歴史民俗系博物館がないため、現物を通して歴史と現況を体感しながら まちの歴史をふり返る場が 極めて限られる。今回の発表は その点を意識した展開であったことをまず記しておきたい。



1968年頃に建て替えられ現在に至る『藤の湯』(手稲区手稲本町2-2)のファサード

銭湯の数は、昭和40年代半ばをピークにひたすら減少してきた。最大時には札幌が約260軒、北海道で約1千軒、全国では約2万軒に及んだが、約半世紀後の現在はいずれも6分の1弱まで減少。背景には、経済成長に伴う家風呂の普及、昭和50年代以降全国に広まるレジャー型「スーパー銭湯」の増加などが挙げられる。

加えて昭和63～平成元(1988～89)年にかけて竹下内閣が行った「ふるさと創生事業」の影響があった。用途を限らず全自治体に1億円を交付した事業で、北海道ではかなりの自治体が「公共温泉」の建設費用に活用。競う

ように温泉が乱立した。結果、前からあった地域型の銭湯は次々姿を消す。

今回は銭湯の備品を通して、地域特性や時代の流れが見えることを話した。これまでさまざまな「まち文化」を調べてきたが、歴史は文字や地図・図版だけでなく、現物からも読み解くことができる。現物を保存することの意味、博物館の存在意義はそこにもある。

たとえば、銭湯の“湯桶”。かつて日本の湯屋(銭湯)では、桶や腰かけはもちろん、浴室の浴槽も床もすべて、木の文化で埋め尽くされた。だが木桶は清掃が大変で、雑菌が繁殖しやすい。保健所からは衛生面で対応できる素材の桶が懸案事項として示され、アルマイトやジュラルミンの金属桶や合成樹脂の桶が登場。その流れを制したのが、昭和38(1963)年に東京の睦和商事が作り出した「ケロリンPR湯桶」だった。



各種素材の湯桶
左下=木 右下=ジュラルミン
上3点=合成樹脂製 PR湯桶
(左から内外薬品「ケロリン」白・花王「ビオレU」・内外薬品「ケロリン」黄)



『手稲湯』(手稲東2)と『富士の湯』(山口団地)で使われた「ブラザー」の合成樹脂桶



廃業した『手稲湯』(手稲東2)にかかっていた“東京型”の染め暖簾

きっかけは、企業の営業マンとして道内をまわっていた山浦和明が、登別の温泉旅館で見た内底に広告板の貼られた桶。その後、入れ墨方式の印刷技術や 富山の内外薬品と出会い、ケロリン桶は誕生する。サイズには 関東型(大)と関西型(小)があり、山浦社長からは「北海道は関東型が多い」と聞いた。だが平成を迎えた1990年代、実際に札幌の全銭湯を調べると 多かったのは関西型。使われながら比率が変動したのかもしれないが、自分で現場を歩くことの重要性を痛感した。

暖簾も地域性を映し出す。“北海道型”は“大阪型”をコンパクトにした形状で、関西と北海道がかつて北前船で結ばれ、その後も銭湯文化の流入路になったことが見えてくる。“京都型”は京都の銭湯が男女の入口が離れた構造のため 暖簾は2枚に分かれる。また丈の短い“東京型”は、前に突き出した玄関と、暖簾を粹にはね上げて出入りしたい江戸っ子の気風が反映された。脱衣籠や営業札にも地域色が見られたが、時代とともにその差は消えつつある。

手稲の現役銭湯で最も古いのが 手稲本町2-2の『藤の湯』。明治初期に温泉宿として始まり、その後 銭湯になる。現経営者の森山光夫さんによると、直接あゆみがわかる資料は残されておらず、自らの区切りとして、平成31(2019)年4月を 創業百年の節目とした。現在の建物は 昭和43(1968)年頃に建てられたもので、そこには様々な歴史が生きている。銭湯初代 森山米蔵の頃から『藤の湯』を見守ってきたという 木彫りの恵比寿と大黒、数年前に販売をやめたアイスケースには すでになくなった商品の懐かしい意匠も健在だ。そして富士山ではなく 外国の風景を描いたタイルのモザイク画。脱衣場にも浴室にも 多彩な「まち文化」が同居する。

「浴場組合」の名簿によると、昭和28(1953)年版には 手稲町字軽川に『藤乃湯』(森山米蔵)と『松乃湯』(土田金政)が出てくる。その後、昭和40(1965)年版に『手稲湯』(山本筆次・札幌郡手稲東2)、昭和49(1974)年版に『富士の湯』(高橋藤雄・手稲山口43)。さらに『華の湯』(山本ヤエ子・手稲西野4-4-210)と『あけぼの湯』(小武博敏・手稲山口6-40)が増え、この時点で“手稲”には6軒の銭湯が存在した。

最後に広く銭湯のあゆみを補足する。日本の銭湯の始まりは平安時代の京都で、大阪が慶長5(1600)年、江戸は慶長6(1601)年に登場。北海道では文化5(1808)年の記録で箱館に5軒の湯屋があり、同時期の松前に5軒、江差にもあった。小樽では明治に入る前の地図に記載がある。

札幌の嚆矢は 明治3(1870)年に南1西1で小川万次郎が始めた湯屋。ニシン釜の浴槽に屋根を掛けたものだったという。それから約150年。地域コミュニティの核として人を結んできた地域型銭湯は、驚くべき速度で激減している。このことの将来的な意味は、銭湯を活用しない人も考える必要があるだろう。繰り返しになるが、札幌には まちの歴史文化を伝える市の博物館がない。この事実内に包まれる将来的なリスクは、おそらく想像以上に大きい。



『藤の湯』の恵比須・大黒像



『藤の湯』の“北海道型”暖簾(牛乳石鯀の販促用暖簾)

*編集注：塚田敏信氏は現在、『朝日新聞』北海道版に「まち歩きのおすすめ」(毎週金曜日・夕刊)を執筆中で、本年4月26日には『藤の湯』が、8月30日には『あけぼの湯』の記事が掲載されました。ウェブ上の「朝日新聞デジタル」www.asahi.com/area/hokkaido/articles/list0100097.htmlでも読むことができます。ご参照ください。

◆ オピニオン

「歴史に学ぶ」ことの重要性

北海道新幹線の開業に向けて、トンネルを掘る起工式がこのほど行われた。また、それに伴うトンネル発生土（掘削土）の受け入れ候補地についての住民説明会も行われた。

新幹線工事を進める 鉄道建設・運輸施設整備支援機構によると、手稲では、旧手稲鉱山の上を4.4kmにわたって「札樽トンネル」（星置トンネル）が開削され、工事で発生する掘削土を、「宮町浄水場」がある金山地区の手稲鉱山砕石場跡地に置く（捨てる？）計画という。トンネルからの出土量がどれほどになるか定かではないが、かなりの量になるらしい。こうした掘削土を、よりよって浄水場の近くに捨てるにはにわかに信じがたい思いだが、しかも その土には重金属が含まれているかもしれないと聞いて、ますます心配になったのは私だけではないだろう。案の定、金山地区で開かれた二回にわたる住民説明会では、反対の声が相次いだという。

この経緯を聞いて、真っ先に思いだしたのは「歴史に学ぶ」ことの大切さであり、何よりその重要性だった。というのは、手稲鉱山の坑道から出た有毒重金属を含む鉱毒水事故が、過去に何度も起きていたからである。新幹線トンネルは、その手稲鉱山があったエリアを通るわけで、これら掘削土にも、カドミウム、六価クロム、ヒ素、鉛などの重金属が含まれるのは必至といえまいか。

過去の鉱毒水問題は、戦前では 鉱山最盛期の昭和 12（1937）年～14（1939）年まで、また戦後では 閉山後の昭和 61（1986）年にも起きている。これらの出水では、養鯉池、飲用水、魚介類等に被害を出して、補償問題にもなった。とりわけ昭和 61 年のときは 年末 12 月 28 日の夜に、まさに「寝耳に水」の諺どおり 大量の鉱毒水が坑内から溢れだし、稲穂地区の住宅に被害が及んだほか一時は、札樽国道、函館本線をストップさせるほどの騒ぎとなった。鉱毒水は最終的に石狩湾に流れて、フナ、ウグイ、ホッキなどの魚介類を死滅させたことも、さほど遠い記憶ではない。

以来、かつて手稲鉱山を所有していた三菱は、これら鉱毒水を二度と発生させないという方針で、問題の重金属を中和し、一定基準以下にして川（金山川）に流すという専門会社（当初は三菱マテリアル、現在はエコマネジメント）を設置し、現在もなお処理にあたっている。

重金属を含むトンネル掘削土を浄水場近くに置きたいとの説明を聞き、水の汚染とともに台風・集中豪雨等によって残土が土石流発生につながらないか、非常に危惧される。今こそ、関係者には過去の歴史を学んでいただき、住民が不安にならないよう適切に処理されることを願ってやまない。

村元健治（手稲郷土史研究会 会員）

TOPIX

手稲郷土史研究会の平木重男会員の体験談が新聞記事に…

8月23日の『北海道新聞』に、手稲郷土史研究会の重鎮 平木重男会員の戦争体験が紹介されました。

太平洋戦争末期、「満蒙開拓団」として一家で旧満州に入植した平木会員は、昭和 20 年 4 月に召集、北朝鮮との国境付近に派遣されます。終戦前夜には脱走を試みるも、仲間が殺害される惨状を目にしました。昭和 21 年 10 月帰還。開拓団のお父様はソ連侵攻時に集団自決され、ご兄妹も消息不明に…。

「戦争で良かったことなど一つもない」と訴える平木会員。これからもどうぞお元気で、次代を担う人たちに戦争の愚かさを伝え続けてください。



8月23日付『北海道新聞』札幌圏版より

● 出版余話

「手稲山をもう一度樹海の森に戻したらどうですか」



俵 浩三さん

高橋延清氏の著書から
南富良野の樹海の
ページを開き説明

拙著『北海道造林合資会社物語』を5月19日に刊行してすぐに、北海道新聞の取材を受けた。これは当研究会会員の長縄三郎さんのご紹介によるもので、翌々日の夕刊に紙面の半分を占めるほどの扱いで掲載されたときは、本の出来栄えに比較して不相応に思われ、大いに恐縮した次第である。

さて、その記事が出てまもなく、俵 浩三さんという方からお手紙を頂戴した。「当方も昔、田中 壤について書いたことがあり、よろしければあなたの本と物々交換しませんか」という。もとより私にも異存はなく、ほどなくお互いが本を受け取った。俵さんは、『北海道・緑の環境史』（2008年）と『牧野植物図鑑の謎』（1999年）のご著書と一緒に、本多静六の記事や書評など、色々とりまぜて送

ってくれた。驚いたことに、俵さんは本多静六の孫弟子であった。千葉大学園芸学部のご出身で、その後、道庁に入り、林務部、環境部に長く在籍されたそうだ。俵さんが人生の転機になったという『北海道の自然保護 その歴史と思想』を北海道大学図書刊行会から出されたのは1979年、野幌森林公園事務局長を務めた頃だった。退官後、1983年から2001年まで専修大学短期大学教授として造園学を教えるかたわら、1984年から北海道自然保護協会の理事、1994年から2004年までは同協会の会長として活躍されたのである。『北海道・緑の環境史』のクライマックスは、土幌高原道路、千歳川放水路計画、日高横断道路などの阻止活動であり、いずれも中止を勝ち取っている。たいへんな“つわもの”とお見受けした。その後も数回にわたり資料類を送っていただいた。

私に会って何かを伝えたいというお気持ちが伝わり、8月29日、いよいよお会いすることになった。会場場所に行ってみると、なんと20冊ほどの図書に加え、ファイルやコピーが20数枚もあり、次から次へと説明を受けて、気がつくとも既に二時間半が経っていた。

どろ亀さんこと故高橋延清氏とも交流が深かったそうで、どうやら俵さんが最後に行き着いた場所が氏の発表した『林分施業法』のようだった。そのとき、拙著に触れるように「手稲山をもう一度樹海の森に戻したらどうですか」とおっしゃったのである。この日は私は頭が一杯になり、その段階で引き上げてきた。しかし、大きな宿題をいただいたことには違いなく、改めて自分も勉強しなければならなくなった。また図書館に通い、『林分施業法』を勉強中である。近々にもう一度お目にかかりたいと考えている。

沖田 紘昭（手稲郷土史研究会 会員）



★「手稲記念館」見学会へのお誘い 札幌市手稲記念館は、手稲町と札幌市との合併を記念して昭和44年に開館し、おもに旧手稲町時代の開拓の歴史に関する資料を展示しています。手稲郷土史研究会では、このたび見学会を企画しました（世話人：齊藤隆夫 会員）。昔の手稲へ想いを馳せてみませんか！ 実施日＝9月25日（水）10:00より、集合場所＝手稲記念館 正面玄関前（西区西町南21丁目3/ジェイアール北海道バス・中央バス「西町北20丁目」停から徒歩5分 または 地下鉄「宮の沢」駅から徒歩10分）。参加無料、申し込み不要。当日直接、集合場所へお越しください。

★「新川フットパス&川下り」は中止となりました 9月7日（土）に予定していた『新川フットパス&川下り』（新川流域を楽しくする会・手稲郷土史研究会・前田連合町内会 共催）は、降雨による影響などを考慮し中止にいたしました。次回開催は来年7月の予定です。

次回定例会 ⇒ 発表内容「国体に行った手稲町役場野球チーム」／ 藪輪隆宏氏（木の実歯科 院長）／

10月9日（水）18:15～／手稲区民センター2階 第一会議室／当研究会の会員でない方の聴講も可